触常者とは誰か

― 自尊心・主導権・持続力を兼ね備えた“当事者”の模索 ―

国立民族学博物館　広瀬浩二郎

【「触常者宣言」の背景】

2009 年８月～11 月、私は「点字の考案者ルイ・ブライユ生誕 200 年」を記念する企画展「…点天展…」を開催した。この展覧会の関連図書、参考文献として刊行したのが拙著『さわる文化への招待』（世界思想社）である。企画展の展示資料を集める国内外の調査を経て、拙著を練り上げる最終段階で生まれたのが「触常者宣言」だった。

私と点字のつながりは深く長い。大げさな言い方になるが、失明した私に「自立」の自信と「社会参加」の自由を与えてくれたのが点字である。盲学校時代の６年間、私は点字教科書・参考書を頼りに、自分なりの“考”“交”“耕”の探究に取り組んだ。その集大成となるのが大学受験である。点字受験とは、当時の私にとって「完全参加と平等」を実現するための挑戦だった。

私の半生からもわかるように、少なからぬ視覚障害者が点字をマスターすることによって「自立」と「社会参加」を享受している。「点字の展示」を行うのなら、もちろんブライユへの感謝、視覚障害者の文字としての点字の必要性をアピールすることは不可欠の要素である。しかし、それだけでは他の視覚障害関係者が企画するイベントの趣旨と同じになってしまう。生意気な言い方になるが、私にしかできない、私だからできる展覧会にしたい。私は「目に見えぬ」ブライユと対話するかのように、彼の伝記を何度も読み返した。

点字は、世界の視覚障害者に「自立」と「社会参加」の恩恵をもたらしたのは確かだが、見常者にとってどんな意味を持つのか。「目に見えぬ」ブライユのメッセージを「目に見える」展示に集約するためのキーワードは、やはり“さわる”しかない。点字を「さわる文化」として再評価し、視覚優位の現代社会の「常識」を問い直すことが、「…点天展…」のメインテーマとなった。

ブライユ生誕 200 年の企画展が終了し、５年が過ぎた。残念ながら、本人にとってはオリジナリティあふれる「点字の展示」や拙著が、世間の見常者たちの生き方に影響を及ぼしたとは思えない。とはいえ、「22 世紀に点字を伝えていくために、あなたは何ができるのか」というブライユからの問いかけに、不十分ながら私は答えを出したつもりである。その答えを凝縮したのが「触常者宣言」だったということになる。

【「触常者宣言」の未来】

次に、やや批判的な立場から「触常者宣言」の問題点を挙げてみることにしよう。じつは私の心底には、「視覚障害者＝触常者」は成り立つのだろうかという躊躇がある。点字を読めない（読まない）中途失明者の数が増えており、点字を日々触読する触常者はマイノリティの中のマイノリティとなっている。児童・生徒数が減少し、重複障害の割合が高くなった盲学校教育の現場では、触知・触察の技法、触学・触楽の醍醐味を継承・発展させていくのが困難な状況もある。高齢化社会を迎え、弱視（ロービジョン）の視覚障害者は増加したが、一般に医学・福祉の分野では、残存視力の活用が強調されている。現状では弱視者が「さわる文化」に出会う機会は少ない。

触常者という概念を突き詰めていくと、さらに疑問が生じる。そもそも、触常者は見常者になれないが、見常者は触常者になれるのではなかろうか。「触常者宣言」では「見常者は点字を触読することができない」と断言しているが、実際のところ、私の周りには点字をさわって読むことができる見常者が何人かいる。私は 13 歳の時に失明し、必要に迫られて点字の触読を練習・習得した。いうまでもなく、私をはじめ、触常者の指先が特別に敏感だということはない。個人差はあるが、見常者も練習すれば、点字の触読能力を習得できる。ただ、見常者は目でも点字が読めるし、情報入手手段として触読は不必要なので、わざわざ練習しないだけである。

2009 年の企画展の理念を拡大・応用し、私は見常者を対象とする“さわる”体験型ワークショップを各方面で実施している。ワークショップの主眼は、「さわる文化」の豊かさ、奥深さを見常者に伝えることである。では、ワークショップが成功し、見常者の間に「さわる文化」が定着したらどうなるだろう。日常生活で彼らがどんどん“さわる”ようになれば、触常者の存在意義は消えてしまう。こんな自己矛盾を感じている。

たしかに、理詰めで考えていくと、触常者の地位は危うい。しかし、社会とは簡単に変わるものではない。触常者である私が、社会を変えようとする活動を展開し、その結果として触常者が特性を失うのなら、それはそれでいいと思う。月並みな言い方になるが、「触常者と見常者の区別がなくなり、万人が触常者化する社会」を追い求め、これからも“さわる”ワークショップを継続していくことにしよう。私は、「さわる文化」とは視覚障害者固有のものでなく、万人に開かれた文化だと規定している。たまたま視覚障害者は視覚の便利さ、あるいは束縛から解放されたために、「さわる文化」を開拓・創造できたのだといえる。だから、「触常者ではない視覚障害者」や「視覚障害者ではない触常者」がいる方が自然なのである。

「触常者≠視覚障害者」だと頭の中ではわかっていても、私は視覚障害イメージの転換をめざし、2009 年に「触常者宣言」を発表した。その背景には、触覚文字としての点字の危機に直面し、21 世紀の視覚障害者は何にアイデンティティを求めればいいのかという私の悩み、焦りがあった。おりしも 2000 年代に入り、「最後の瞽女」小林ハル、「最後の琵琶法師」永田法順が相次いで死去する。独自の盲人文化を育んだ琵琶法師・瞽女の消滅は、「何かをしなければ」という私の“当事者”感覚を呼び覚ました。抽象的な「触常者宣言」に肉付けし、触文化論を構築するのが、現在の私の研究の眼目だといえよう。

最後に「触常者宣言」の理論を実践に移す戦略として、以下の三つの課題を挙げる。

１．触常者の自尊心を育成する → 視覚障害教育現場の意識改革
２．触常者の主導権を拡充する → 大学における障害学生支援のあり方の再検討
３．触常者の持続力を稽古する → 「誰もが楽しめる博物館」の具体化

私の研究の拠点は盲学校・大学・博物館である。まずは自分の身近な所で「触常者」の自尊心・主導権・持続力を鍛える取り組みを積み重ね、〈当事者宣言〉の可能性を掘り下げていきたい。